「思い出の故郷　吉野」（抜粋）　森田重晴

常呂町高齢者教室『平成６年度　オホーツク大学文集トーコロ』掲載

（略）日吉地区の鈴木石油スタンドから吉野線に入り約３キロ、隈川のせせらぎの音が左に聞こえ、川と道路が並行する山間のところから昔の「隈川部落」、現在の吉野地区に入る。さらに３キロほど行った地点に、最近有名になった「昆虫の家」が右側に現れる。ここが昔の「隈川小学校」の跡地である。今から約75年前、「手師学小学校」、現在の日吉校の分教授所として開校された小学校であった。この地で生を受けた私は、７年間幼児期をここで過ごし、大正11年春３月から、これよりさらに約２キロ上流、現在の常呂町営水道の取水場の場所で50年の間生活した。

さて吉野の開拓は、大正４年帯広の笠原柳市氏の放牧地として国から貸付許可を受けて、宮原養一氏、佐藤園吉氏らを連れて入地したのに始まる。翌５年、愛知県から黒瀬廣助氏が同じく国から払い下げ許可を取り、今井国蔵氏ら数人を伴い入地してきた天をつく大木の自然林で、昼なお暗い密林を冬は切り倒し、春になり雪が解ければ熊笹を刈り、ひと鍬ひと鍬血のにじむような思いで開墾されていった。

大正８年には入地者も15戸を超えるほどになり、日吉小学校に通う生徒も10名を超えるほどになった。ここに初めて日吉小学校の分校として、笠原柳一氏の家を借りて開校されたのであった。

注：大正８年４月24日　手師学尋常小学校所属隈川特別教授場として設立認可・開校
　　５月８日　元笠原農場事務所、掘っ立て草葺き12坪を校舎として開校

大正11年、生徒の数も30名を超えるようになり、初めて学校らしい校舎が落成し、昭和51年まで約60年の長い間、地域の中心的存在として部落の発展に寄与してきた。

注：大正11年12月27日　隈川特別教授場新校舎落成（木造平屋建32坪）

農業が主体とした吉野地区は、常呂川の支流である小さな流れの隈川に沿った山間の耕地で、平地は少なく高台の傾斜地がほとんであったが、地味はおおむね肥沃であったようである。

しかし、常呂村役場までは約25キロの交通不便な地帯である。大正６年５月、部落民の手で北見方面に通ずる道路が開かれ、翌７年には佐呂間町仁倉部落に通ずる道路が付けられたが、いずれも苅分道であるので、人が通るだけの道であった。

それから10年後の昭和２年、町村道として車の通れる正規な道路が、今の北登と仁頃間に、さらに仁頃と佐呂間間に完成し、翌３年、日吉まで延びてきて交通の便は大変良くなり、吉野地区は年々発展してきた。

当時の吉野の農業は、家庭での１年間の食糧を確保し、換金作物として栽培されていたのが北見特産のハッカであった。傾斜地でも容易に耕作でき、宿根性の作物であるので一度植え付けをすれば何十年でも収穫ができる菜草である。秋収穫の後、地を耕してハローをかけておくだけ。翌年はただ除草するだけで、秋９月中旬から刈り取り、架掛けして乾

燥の後、10月中旬頃から蒸溜釜に踏み込まれ、蒸溜される。蒸溜釜の構造は高さ1.5メートル、直径1.5メートルくらい。釜に入れたハッカの茎葉は蒸され、釜の上に取り付けられた管を通って釜の外に出て冷やされて液体となる。これが取り卸しハッカ油である。このハッカはあまり天候に左右されることなく毎年良い収穫があり、価格も他の作物よりは比較にならないほど高値で売れたので、吉野の農家はそれなりに大変安楽な生活ができた。50戸ほどの吉野にこうした蒸溜施設が15ヶ所くらいあった。10月の末頃になればこれら蒸溜釜から流れ出たハッカの香りが漂い、本当に心地よい秋の日が続いたものであった。

こうした平和な楽しい日々も昭和16年12月、大東亜戦争に突入したためアメリカへの輸出は止まり、畑作物は麦や豆など食糧増産体制に切り替わっていった。そして昭和20年８月、敗戦の日を迎える。（略）

昭和35年頃からまたまたハッカの耕作が日吉・吉野・登地区で盛り上がり、作付けが増反されてきたので農協直営の近代的蒸溜工場が日吉に建設された。農家はハッカに大きな期待をかけて増産に力を入れてきたが、42年頃からアメリカで人造ハッカが開発され、北見産ハッカはアメリカに輸出できなくなった。現在ハッカは、滝上町で少々香料として耕作されていることを聞くのみである。

注：昭和33年９月12日　日吉ハッカ貯蔵庫完成
　　昭和42年９月30日　常呂町農協ハッカ蒸留合理化工場操業開始
　　昭和50年10月　　閉鎖

昭和40年頃から農業は、逐次アメリカの方式に変わり、大型化・機械化されてきた。吉野にもトラクターが入り、防除機が入り、今までの馬の力を借りての営農は、年とともに変わってきた。こうした大型機械を入れても傾斜地の多い吉野での営農は成り立たないと判断した農家は次々と畑に落葉松の苗を植え、将来の林産に期待をかけて離農。北見市方面に職を求めて吉野を去っていった。

昭和50年、かつては50戸あまりあった吉野地区もわずか10戸ほどになり、小学校の生徒もわずか６名となったため、51年３月、ついに廃校の止むなきにいたった。（略）